田辺聖子と古典文学 ：『新源氏物語』における花散里の形象を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中, 周子 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4740

田辺聖子と古典文学

―『新源氏物語』における花散里の形象を中心に―

中　周　子

一、はじめに

田辺聖子は日本の古典文学をこよなく愛した作家である。『文車日記―私の古典散歩』のあとがきにも「古典への片思いともあこがれとも、秘めたる恋とでも申しましょうか。今までの人生で私は、一つ、また一つと、大好きな古典作品を心の底にためていったのでした」と、古典文学へのあふれる思いがつづられている。

古典文学の中で田辺聖子が最も愛した作品は、「恋の『物語のいで来はじめの祖』」と言挙げし、「世界的水準を抜く」「恋愛物語の最高傑作」（『全集』別巻1月報）と絶賛する『源氏物語』である。

『文車日記』には、「毎日の国文科の授業が心の底から好きで楽しかった」と樟蔭女子専門学校での思い出が書かれており、『歳月切符』「師弟の縁」にも「国文科出身の女の戯作者として、どうしても一度は挑みたかった」のが「『源氏物語』の口語訳」であったという。田辺聖子は『源氏物語』を題材とするエッセーや小説など多彩な書を著している。『新源氏物語』、『新源氏物語・霧深き宇治の恋』、『私本・源氏物語』、『春のめざめは紫の巻・新・私本源氏物語』、『恋のからたち垣の巻・異本源氏物語』、『絵双紙源氏物語』、『源氏たまゆら』、『源氏物語の男たち・ミスター・ゲンジの生活と意見』、『源氏物語男の世界』、『花源氏物語』、『源氏・拾花春秋・源氏物語をいける』、『源氏紙風船』、『田辺聖子の源氏がたり』等である。

それらの作品中から、『新源氏物語』（以後「新源氏」と略称）を取り上げて、田辺聖子が『源氏物語』をいかに巧みに現代小説に新生させたかを見てゆきたいと思う。

二、原典の再構成

「新源氏」は昭和四十九年十一月八日号の『週間朝日』誌上に連載が開始された。

周知の如く、現存する『源氏物語』は「いづれの御時にか、女御、

更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり」と、光源氏の母桐壺更衣を紹介する一文ではじまる。しかし、「新源氏」は、この桐壺巻の冒頭から始めることはしていない。

光源氏、光源氏と世上の人々はことごとしいあだ名をつけ、浮ついた色ごのみの公達ともてはやすのを当の源氏自身はあじけないことに思っている。

彼は真実のところ、まめやかでまじめな心持ちの青年である。

このように「新源氏」は冒頭から物語の主人公・光源氏その人について語り出す。原典では次の箒木巻の冒頭にあたる部分である。

光源氏、名のみことことしう、言ひ消たれたまふ咎多かなるに、いとど、かかるすきごとどもを、末の世にも聞き伝へて、軽びたる名をや流さむと、忍びたまへるかくろへごとをさへ、語り伝へけむ人のもの言ひさがなさよ。さるは、いといたく世を憚り、まめだちたまひけるほど、なよびかにおかしきことはなくて、交野の少将には笑はれたまひけむかし。

この箒木巻の冒頭は、桐壺巻の内容を前提としないため、『源氏物語』が長編物語として成立する以前の、光源氏物語の冒頭であった可能性が論じられている。この時光源氏は十七才。物語進行上はまだ葵の上と結婚した頃で恋の遍歴が始まる前の頃、「まめだちたまひけるほど」とあるように、世を憚りまじめにと心がけていた頃のことである。

この箒木の冒頭に田辺聖子は注目した。光源氏の物語を、まだ純情であった十代の頃の青年時代から語り始めたのである。『源氏物語』は有名であるが、全巻を通読した人は少ない。しかし、作品を読まずに光源氏を色好み・プレイボーイというイメージで捉える人は多い。田辺聖子は、そのような現代の読者に、光源氏にも純情でまじめな青年の頃があったことを知らせたかったのであろう。桐壺更衣ではなく、これから展開する壮大な物語の主人公を提示して、物語を始めている。「新源氏」冒頭のわずか数行を見ても、「現代語訳というだけではなく、紙上の〈源氏の君〉を私なりに〈創造〉したかった」(『全集』別巻1、月報)ことが理解されるのである。

また作品化するに当たって「不壊の白珠ともいうべき原典をうんと噛みくだき、その美しい細片を、ひろく敷きつめ、ちりばめてしまう」(『源氏紙風船』)と述べている。それはどのように行われたのであろうか。

以下、花散里という女君の形象に注目することで、「新源氏」における原典再生の過程を読み解いてみたい。花散里は、数巻からなる『私本・源氏物語』においても女主人公となっており、田辺聖子が好んで描いた女君の一人であったと思われるからである。

三、『源氏物語』花散里巻

花散里は、光源氏の父桐壺帝の女御の妹で、原典では花散里巻以降の二一の巻に五一回登場する。女君の中では最多登場する紫の上の三七巻、二六二回には及ばないものの、末摘花の六巻、四四回、朝顔姫君の九巻、三三回、空蟬の七巻、四九回よりは多く、六条御息所の一五巻、五六回や朧月夜の一二巻、五五回に並んでいる。光源氏の正妻葵の上の遺児夕霧の後見を任され、後には夕顔の遺児玉鬘をも任されるほど、源氏の揺るぎない信頼を得ている。紫の上とも親交があり、六条院には申し合わせて入居している。死の影におびえる紫の上を慰めてもいる。地味ながら、物語中において重要な役割を果たしている女君である。彼女が物語に初めて登場するのは花散里巻である。ところが、巻名からして花散里が主人公であろうとの予測を裏切るかのように、彼女の描写はあまりにも少ない。まず、原典では、花散里をどのように登場させているかを見ておこう。

花散里巻を構成するのは次の七つの段落である。（一）苦境に立つ源氏、（二）麗景殿女御のこと、（三）花散里との縁、（四）中川の女との贈答、（五）麗景殿女御との贈答、（六）花散里との逢瀬、（七）源氏と女君たち。以下、順を追って見てゆこう。

（一）光源氏が花散里を思い出して訪れようとするのは、「世の中なべて厭はしう思しならるる」頃、すなわち、朧月夜との恋愛事件が発覚、政敵右大臣方に光源氏失脚の好機と目され官位も剥奪され、身から出た錆ではあるが、何もかもいやになった頃である。

（二）麗景殿女御という桐壺帝の女御が御子もなく淋しい暮らし向きであること（三）その妹花散里とのなれそめが語られる。ここで、花散里は「御おとうとの三の君、内裏わたりにてはかなうほのめきたまひし名残の、例の御心なれば、さすがに忘れも果てたまはず、わざともてなしたまはぬに、人の御心をのみ尽くし果てたまふ」と、紹介される。

父桐壺帝の許にいた頃、ふとしたきっかけで、はかない契りを交わすが、表だった扱いもせず、花散里は物思いを尽くしていたというのである。その花散里を、源氏は鬱々と過ごす日々にふと思い出し、居ても立ってもいられずに訪れるのである。

（四）ところが、光源氏は花散里の許へ行く途中に通りかかった、中川辺に住む女にも立ち寄ろうとして和歌を贈る。しかし、すげなく拒まれ、思い直して花散里の邸に向かうのである。

（五）光源氏は先ず、麗景殿女御の許を訪れて父桐壺の思い出を語り、和歌を贈答する。この時の光源氏の歌「橘の香をなつかしみほととぎす花散る里をたづねてぞとふ」が巻名の由来となったのである。

（六）巻の終わり近くなって、ようやく光源氏は花散里の部屋（西面）を訪れる。肝心の二人の逢瀬の描写に費やされるのは、わずか二、三行にすぎない。すなわち、「西面には、わざとなく忍びやかにうちふるまひたまひてのぞきたまへるも、めづらしきに添へて世に目なれぬ御さまなれば、つらさも忘れぬべし。何やかやと、

例の、なつかしくかたらひたまふも、おぼさぬことにあらざるべし」と、花散里は光源氏の美しさと優しい言葉に、待ちわびた月日の恨みも忘れたとあるのみで、花散里の言葉も和歌も書き留められてはいない。

（七）最後は、光源氏は大勢の女君のいずれをも捨てがたく思うが、中川の女のように心変わりしてしまう者もいるのだと結ぶ。

原典では花散里の印象はきわめて希薄であるというほかない。読み手は、光源氏の心情「思ひ出でたまふには、忍びがたくて」や、草子地「なつかしくかたらひたまふも、おぼさぬことにあらざるべし」から、その対象である女君の存在を想像するしかない。「主人公の顔が見えないのです」（『波』平成二年五月号）という田辺聖子の言が思い起こされよう。

なお、この巻では花散里は麗景殿の妹、三の君と呼ばれている。花散里と呼ばれるのは、次の須磨巻になってからである。

四、『新源氏物語』における花散里

では、「新源氏」は花散里をどのように描きあげたのだろうか。「新源氏」において花散里が登場する「ほととぎす昔恋しき花散る里の巻」を見てゆこう。

この巻は、ほとんど原文の筋を辿っており、七つの段落から成る構成も同じである。ところが、それぞれの場面の描写に費やされた行数を比べると次のような違いがある。数字は「新源氏」の行数。（　）内が原典の行数である。

（一）苦境に立つ源氏	4	（4）
（二）麗景殿女御のこと	4	（3）
（三）花散里との縁	12	（6）
（四）中川の女との贈答	33	（24）
（五）麗景殿女御との贈答	22	（25）
（六）花散里との逢瀬	39	（3）
（七）源氏と女君たち	7	（6）

この比較は厳密性に欠けるものであるが、それでも「新源氏」が（三）の花散里と源氏との縁について加筆していること、また（六）の二人の逢瀬の場面を、巻の中心に据えるべく大幅に書き加えていることは、一目瞭然である。それ以外の、花散里が登場しない場面は、ほぼ原文を現代語訳した体になっている。

まず、（一）の冒頭部分では、「源氏の、人しれぬ恋の苦労はみずから求めて得たことで、誰を怨もうすべもない。藤壺の中宮への思いといい、朧月夜の尚侍の君への恋といい……。すべて今にはじまったことではないのだが、その上にこのごろは、何かにつけて圧迫が多く面白くないことが重なってゆく」と、源氏の置かれている状況が説明される。

（二）で桐壺帝の女御のこと、（三）では、女御の妹・花散里とのなれそめを語り、「このごろ世の中の面白くないのに気を腐らしているときとて、折々はその女のことをしみじみと思い出したりし、五月雨の珍しい晴れ間に訪ねてみた」と、ほぼ原文通りの展開を辿

る。（ちなみに「女」にはすべて「ひと」とルビが施されている。）

ただし（三）には、なぜ花散里を訪れようとするのかという光源氏の心情が書き加えられている。

「いったい、その女には、そんな気持をおこさせるところがあった。こちらが順調に人生を送って、わが世の春を謳っているときには、淡々しい存在なのだが、失意の日々には強く思い出され、会いたくなるような心柄の女なのである。他の女人にはいえないような、男の弱音や愚痴を、ついこぼしたくなる、いやむろん男の矜持にかけて初めからそんなつもりはないのだが、結果としてついそうなってしまう、という気立ての女なのだった」と、原文の「思ひ出でたまふには、忍びがたくて」という心の動きを具に説明し、後に描かれる二人の逢瀬の場面の会話の伏線としているのである。

そして、（四）の中川辺の女との贈答と（五）の麗景殿女御との贈答は、ほとんど原典の現代語訳といってもよい内容である。

ところが（六）の花散里との逢瀬の場面は大幅に加筆されて、二人の逢瀬が詳細に印象深く描かれている。

思いがけない光源氏の訪れを迎えた花散里を「素直に心から喜んでいるふうで、たおやかに羞じらっていた」と描写する。対する光源氏には、先ほど麗景殿女御に詠みかけた和歌「橘の香をなつかしみほととぎす花散る里をたづねてぞとふ」を思い起こさせ、「ほととぎすは、ほかならぬ自分で、橘の花散る里はこのひとなのである。ほととぎすは花散里に慕い寄らずにいられぬのであった」と悟らせる。花散里を、この巻の主人公として際だたせるために、女君命名の由来を光源氏の心内語によって語らせている。

原典のこの巻では、花散里は麗景殿の妹、三の君と呼ばれるが、「新源氏」は始めて登場する巻において女君に名前を与えている。その後、原文には「何やかやと、例のなつかしく語らひたまふ」としか書かれなかった二人の語らいの場面が、細やかに描出される。

光源氏は開口一番「長らくお目にかかれなくて、さぞお怨みだったでしょうね。今日はあなたのやさしい怨みつらみが聞きたくて」と語りかける。光源氏ならば、かくも言っただろうという台詞である。

そして原文には、ひとことも記されなかった花散里の優しい言葉と表情が「新源氏」にはさまざまに書き加えられている。

「まあ。怨みつらみだなんて……わたくしがそんなこと……。おいで下って、うれしいだけですわ。ほんとうですのよ」と素直に源氏の訪れを喜ぶ花散里は、「たおやかに羞じらって」いる。その「誠実そのもののような表情」に「心なごむ」光源氏は、「うっとうしい世の中になってしまってね」と、今までの薄情さを棚に上げて心の中に溜まっていた不平不満を打ち明ける。「一挙手一投足、目をつけられて非難弾劾のまとになるのだから、いやになってしまうよ。それでここへも来られなくて」。愚痴のないまぜになった勝手な言い訳をする光源氏を、花散里は、長年の夜離れの恨みも忘れて、やさしく懸命になぐさめる。

「時節というものはいたしかたございませんわ。わたくしに

はむずかしいことはわかりませんが。」

「でも、あなたはやがてはゆくすえ、国の固めとおなり遊ばす方ですもの。いつまでも人々がおろそかに思うはずはございません。時勢のうつり変わりで、また、お心の晴れるときもきっとまいりますわ。それまでのご辛抱でございます。」

これらは全く創作された会話であるが、控えめでありながら光源氏の未来を賢察した言葉である。無心であるがゆえに、物事の本質と成り行きを容易に見抜くことのできる聡明さを持ち合わせていることを窺わせる。

原典の螢巻で、花散里は光源氏を驚かす当を得た人物批評をしている。また、夕霧巻においても夕霧を失笑させるほど鋭い光源氏分析を口にする。それらの花散里の聡明さを窺わせる言葉に通じるものといえる。

さらに、花散里の様子を描く箇所を抜き出してみよう。

①「美女というのでもなく、打てばひびく才気もないが、向かいあっていると気がやすまる」

②「おっとりと微笑む」、「気取りも見栄もなく、のんびりしている」、「とりわけ好もしいのは、このひとの物のいいぶりである。たどたどしいほどおっとりして、けだかい善意のようなものが感じられる」

③「長い間をおいて会っても、ついぞ、態度や心ざまが変わったことがない」

これらの描写は、花散里巻には見られないものの、しかし、原典を一読した者には既知のイメージとして受け入れられるものであろう。物語中のどこかに描かれていたことに思い当たるからである。

①の、花散里が美人ではなかったことは、原典にも度々記されている。少女巻で夕霧は「容貌のまほならず」「向ひて見るかひなからむ」と母親代わりの花散里の容貌に心を痛めている。しかし同時に「心ばへのかやうにやはらかならむ人をこそあひ思はめ」と、妻の理想像とも考えている。打てばひびく才気もないことは、澪標巻で花散里の手紙に対する光源氏の評「めづらしく御目おどろくことのなきほど」を思わせる。

②の、おっとりとした物腰も、「御心ざまのおいらかにこめきて」（薄雲巻）、「のどやかにてものしたまふけはひ、いと目やすし」（澪標巻）とくり返し記される。また「例のおいらかにけしきばまぬ花散里」（少女巻）といわれるほど、花散里の優れた美質として固定されたイメージとなっている。

「とりわけ好もしい」と光源氏に言わせている花散里のおっとりとした「物のいいぶり」も、原典に度々描かれている。夕霧に対して、噂になっている未亡人の落葉宮との仲を「いかなる御ことにか」と問いただす時も、「いとおほどかにのたまふ」（夕霧巻）。須磨から帰京後も一向に訪れてくれなかった光源氏への恨み言さえも「のたまへるも、おいらかにらうたげ」（澪標巻）なのである。

玉鬘の養育を頼まれて「うれしかるべきこと」と素直に喜びをあらわし、「よきことかなと、おいらかにのたまふ」。花散里は、いつもおっとりとした物言いをする善意にみちあふれている女君であった。

③にいう、数多の女君と関わりを持ち、滅多に訪れない光源氏に対しても穏やかでかわらぬ愛情を持ち続けることの出来る花散里は「ありがたきまでうしろやすくのどかにものしたま」ふ（薄雲巻）存在であった。光源氏は「わが心の長きも人の心の重きをもうれしく思ふやうなり」（初音巻）と心底から思うのである。このように、花散里と光源氏は、すでに「御心の隔てもなく、あはれなる御なからひなり」と描かれる。

田辺聖子は長い物語の中に度々登場する花散里との出会いを楽しみながら、次第に彼女のイメージを膨らませていったのであろう。そうして、物語中に散在する花散里のイメージの細片を、彼女が初めて登場する巻に美しく敷き詰めて見せたのである。

光源氏は花散里の「ふしぎな匂やかな雰囲気に」つつまれて、「心がのびやかに解放されるのをおぼえ」、「漂流していた船が母港へかえりついたような」心持ちになる。そして、「ふたりきりの夜、かぐはしい橘の花の香りに包まれて光源氏は花散里の君の耳に、やさしい言葉を語りつづける」のである。

「何やかや」という紫式部の省筆部分を、田辺聖子は、かくも語り合ったであろうかという会話によって、原典にはほとんど描かれることのなかった二人の逢瀬を匂いやかに創作したのである。

五、『私本・源氏物語』の花散里

花散里は『私本・源氏物語』（以下「私本・源氏」）にも登場する。「私本・源氏」は、「新源氏」を書き進める一方で書かれた、さらなる私訳・関西弁訳ともいうべき作品である。初出はいずれも『週間小説』に連載されたものである。

「私本・源氏」は、数人の女君と光源氏とのやりとりを描いた次のような各巻からなる。

なんとも夕顔なき恋の始末の巻
北山のすずめっ子の巻
雪の朝の丸太ん棒の巻
森の下草老いぬればの巻
おぼろ頭の春の夜の巻
色気の花は散り散りの里の巻
六条のオバハンの巻
夜あかし潮汲みの巻

若紫を「すずめっ子」、六条御息所を「オバハン」と呼ぶ、これらの巻名を見れば、「私本・源氏」がどのような姿勢で原典を小説化しようとしたかが明らかであろう。

『『私本・源氏物語』は原典の『源氏物語』を読んでいると、どうにもこういうものが書きたくてたまらなくなるという、ムズムズする気持を抑えかねるというもの、『新源氏』が陽画、『私本・源氏』

で陰画、雅と俗の両面から光をあてると『源氏』が立体的になるかもしれない。（「たのしい仕事」『田辺聖子長編全集　第9巻、月報11』）と、本人が語るように、田辺源氏の世界は「私本・源氏」を抜きには語れない。

そこで、最後に、「私本・源氏」において、花散里はどのように形象されているかをも見てゆこう。

「私本・源氏」には原典には登場しない「ヒゲの伴男」という中年の「雑仕」が登場し、語り手となる。原典の語り手が光源氏に仕えた古女房であるのと対照的である。そのため、「私本・源氏」の世界は男性的かつ庶民的な視点から語られる。「ウチの大将」こと光源氏の若気の至りや男の本音も、おおらかに肯定的に描かれる。

花散里の許を訪れるきっかけからしてケッサクである。早朝、六条御息所の許から邸へ帰る途中、「腹へった。何か、食うもんよこせ！」と叫ぶ「わがままな貴公子」光源氏のために、伴男が目前の邸に「せんの女御さまの妹姫」が住んでいることを思い出し、そこで朝食をとることを思いつく。光源氏は花散里の存在を全く忘れているが、空腹に絶えきれずに仕方なく花散里の邸を訪れる。光源氏の忘却のかなたから花散里は登場するのである。

そもそも「色気の花は散り散りの里の巻」という巻名からして、花散里は「色気のない女性」に設定されていることがわかる。花散里の容貌について「新源氏」では「美人というのでもなく」とさらりと描かれるだけだが、「私本源氏」では、源氏は「噂ほどの美人やなかった」と落胆し「そこらの掃いてすてるほどいる平凡な女」、「あんなブス」と決めつける。あまりにも極端な誇張ともいえる件である。

また、「夜になると、（あんなブスのところへいけるかッ。夜は美女と恋のためにあるもんや）などと恩知らずなことをいって、腹がすくとここへ来る、という、あつかましいことをやっている」光源氏の訪問をも、「こうやってご一緒に、おいしいものを頂戴する、こんな嬉しいことはございません。それだけでもう、わたくし充分ですわ」と花散里は無邪気に喜ぶ。その言葉を聞いて、さすがに身勝手さを反省した光源氏が「もとよりここへ来るのは、ご馳走をいただくためや無うて、あんさんと恋をかたらいたいため」と言い訳するが、「お気持ちは嬉しいのですけど」「あのうおなかがふくれるますと、その気が無うなりまして、もう、ほんとうにいけません」と恥ずかしそうに応える花散里。そして―。

「いや、ほんまいうと、私もそうで。おいしいもんをおなかいっぱい食べたあとは、腹を撫でさすってねむたばかり、色気は散り散りになってしまいますな」

「ほんとうに、わたくしの名も花散里ではなくて、色散里、というところでございましょうねえ」

姫君もはにかんでいい、大将は

「色気より食い気どす、ハハハハ」

「ほほほほ」

と仲がよい。

と会話がはずみ、二人は本音で意気投合する。「色気の花も散り散りの里の巻」の巻名はこの場面によるものであろう。「その気が無うなりまして」「その気てどの気」等々、あけすけな、およそ平安貴族の逢う瀬にはふさわしくないように見える会話が続く。

このような「私本・源氏」は、原典からほど遠い作品のように見える。しかし、田辺聖子は「『私本・源氏物語』は、原典の『源氏物語』にわりに忠実に書いている」(『全集』17巻、解説)と言う。確かに、原典と詳細に読み比べると、その通りなのである。

原典の螢巻で数年ぶりに光源氏は花散里の許に泊まる。しかし、「御座なども異々にて」と床も別々にしている。離れた床から、花散里は「その駒もすさめぬ草と名に立てる汀のあやめ今日や引きつる」と「おほどかに」和歌を詠みかける。源氏も「にほどりに影をならぶる若駒はいつかあやめに引きわかるべき」と応じる。

自らを「馬も食べない草」に喩える女君、自分は「あやめ草を食べる若駒」だという光源氏。夫婦生活を喩えた、かなりきわどい比喩を用いたやりとりである。この贈答を語る古女房が「あいだちなき御ことども」(色気も遠慮もない露骨な御歌だこと)と評しているほどである。

このような原典と引き比べると、「私本・源氏」の二人の会話もまた、原典と同質のユーモアにあふれていることがわかる。

「私本・源氏」が、花散里を「海のもの」が大好物という海辺育ちと設定したことも、玉鬘巻で光源氏が女君たちに正月の晴れ着を配る場面で、花散里には、海辺の風物、大波や海松や貝などを模様にした「浅縹の海賦の織物」を贈ったことが思い合わされる。

「私本・源氏」における花散里像も、また、全くの荒唐無稽なものではなく原典に基づいて形象されているといえる。

六、おわりに

田辺聖子以前にも、与謝野晶子、谷崎潤一郎、円地文子など作家による『源氏物語』の現代語訳が行われていた。日本を代表する古典という思い入れと相俟って、いずれの作家たちにも、原作に対する熱い思いがあったと思われるが、そこには幾分の恐れがあったのではなかろうか。

与謝野晶子は生涯に二度、谷崎潤一郎は三度、現代語訳を世に出している。与謝野晶子は、最初「自分は『源氏物語』に対する在来の註釈書の総てに敬意をもっていない」(『新訳源氏物語』序文)とまでの絶大な自信を以て、かなりの意訳を試みたが、後には「粗雑な解と訳文をした罪を爾来二十幾年の間、私は恥じつづけてきた」(『新新訳源氏物語』序文)と言い、より丁寧な全訳を試みている。谷崎潤一郎の場合も、最初は原文の優雅さを伝えるために、原文以上に敬語を多用し一文を長くしたが、後には主語の有無や一文の長短まで原文を踏襲しようと努めている。いずれも(大雑把な言い方になるが)総じて後の現代語訳の方が原典に近づいてゆくという感がする。

ところが、田辺聖子は次第に原典から離れてゆく。まず、「新源

氏」で、丹念かつ大胆に原典の再創造を成し遂げつつ、「私本・源氏」においては、架空の人物「伴男」を登場させ、庶民の中年男性という新たな語り手の視点を設定して、物語の再生を行った。さらには、今回は触れなかったが、『異本・源氏物語』という、原典に依拠しない新しい『源氏物語』を創出している。『源氏物語』に描かれる雅な王朝の恋物語に陶酔する一方で、その雅な世界を「おちょくる」視点を持ちうる作家は、田辺聖子以前にはいなかったのではないだろうか。

現代では『源氏物語』の現代語訳よりも、原典の世界を離れたリライト本が盛んに生み出されている。田辺聖子の「新源氏」は、その先蹤であるとの評価が定着しつつある。「新源氏」は「源氏物語」を知らずとも楽しめる作品である。全く原典に見られない創作箇所も多い。その創作部分が、田辺源氏の大きな魅力であることは確かである。

しかし、田辺聖子は単なる原典離れの旗手であるのみではない。「新源氏」は、『源氏物語』を、その主人公や歌や文章を、『文車日記』の言葉を借りれば、少女の頃から「無類に美しい宝玉のように手のひらにじっと暖めいとしんでいた」田辺聖子が作りあげた、新たな宝玉といえよう。「新源氏」は、類ない原典への愛と才能をそなえた作家田辺聖子によって、紫式部作の「不壊の白珠」を粉砕し、美しい細片にしてちりばめ創り上げられた。それゆえ『源氏物語』と並べて見ても、「新源氏」は一向に、その輝きを失うことなく、むしろその細工の巧みさに魅入らせる。それもまた、「新源氏」の大きな魅力ではなかろうか。

（付記）本稿は平成二十一年度、国文学科公開授業「田辺文学の魅力―『新源氏物語』の面白さ」の講演をもとに加筆したものである。

引用した田辺作品は特に断らない限り、集英社『田辺聖子全集』により、その解説・月報類からの引用は（『全集』○巻）として示した。『源氏物語』本文は、石田穣二・清水好子校注『新潮日本古典集成・源氏物語』によった。